

## Q9 機動力のある教育相談体制づくりのための校長・教頭の役割は何ですか。

不登校対策の充実において、校長・教頭の役割は極めて重要です。校長・教頭は学校における教育相談委員会の開催、相談室の整備や研修の実施など、校内教育相談体制を充実し、機能するようにリーダーシップを発揮することが大切です。

### 1 課題意識をもち、実態を把握する

校長・教頭は、不登校を学校教育全体の在り方にかかわる課題としてとらえることが重要です。児童生徒は様々な悩みをもち、時に自分を見失ったり不応状態になったりします。課題意識をもち、児童生徒の行動の変化を把握することが必要です。また、不登校の背後にある、児童生徒や保護者の学校に対する期待や切実な願いに応えていく姿勢も大切です。

#### <把握したい3つの実態>

##### (1)児童生徒の実態

【出席の状況、不登校の要因、状況の変化、人間関係 等】

##### (2)教員や相談員等の指導力

##### (3)保護者の意識や学校や教員への期待

### 2 情報を共有し、指導方針を徹底する

毎月開催する教育相談委員会や職員会議等の場を活用して、児童生徒の不登校にいたる情報について共有します。不登校の児童生徒がどのような状態にあり、どのような支援を必要としているのか正しく見極めましょう。

会議では、学校としての支援方針を明確にし、教職員の持ち味を生かしながら、適切な支援と多様な学習の機会を提供できるようにします。校長・教頭は、決定した指導方針が確実に実行されるように教職員の共通理解や保護者への周知を図ります。

#### <指導方針を徹底する手順>

##### (1)不登校の状況を総合的に把握する。

##### (2)学校としての具体的な支援方針を決定する。

- ・不登校児童生徒やその保護者にかかわる情報の整理と課題
- ・支援目標の設定

<いつ、どこで、誰が、何のために、何を、どのように 等>

##### (3)学校と家庭の役割分担と協力体制の確立を図る。

##### (4)関係機関との適切な連携・協力ができるようにする。

### 3 日常的な教育相談の充実を図る

教育相談主任や学級担任に任せがちになり、問題が長期化したり、児童生徒や保護者との関係がこじれて、ますます事態が深刻化した例もあります。

校長・教頭の強いリーダーシップの下、学級担任、生徒指導主事、教育相談主任、教務主任、学年主任、養護教諭、スクールカウンセラー、相談員等がそれぞれの役割について相互理解した上で、日頃から連携を密にします。

教職員が一致協力して対応している姿勢は、児童生徒や保護者を安心させ、回復へのエネルギーになります。

### (1)教育相談の充実への校長・教頭としての配慮事項

学級担任等に自信をもたせるように、アドバイスする。

組織が機能するように、教育相談委員会や関係の教職員に指導・助言する。

保護者の学校への信頼回復や保護者との人間関係の改善を支援する。

カウンセリング研修等を積極的に進め、指導者を育成する。

校内研修等により、教職員の資質・能力の向上を図る。

### (2)ねばり強い継続的なかわりを生む小さな変化を見つける努力

児童生徒の変容が見られないとき、「やるだけやったのだから」「どうしていいのかわからない」「忙しいから」「一人の児童生徒だけにかまっていられない」等、教職員がマイナス思考をする場合があります。働きかけを一切しない場合や、必要なかわりをもつことまでも控えて時期を失ってしまう場合もあります。

不登校への対応では、児童生徒のありのままの姿を受けとめ、先入観をもつことなく粘り強くかわることが必要です。「そっとしておいてほしい」という気持ちと、「放っておかれると淋しい」という相反する複雑な感情を抱いているということにも留意し、教職員が継続的にかかわることができるようにします。一見して動きが見られないような事例でも、家庭生活や学校生活における小さな変化が必ずあります。

#### <不登校児童生徒が見せる小さな変化の例>

- ・起床時刻が以前より早くなった。(たとえ5分、10分でも)
- ・目線を合わせるようになった。 ・「退屈だ。」と言うようになった。
- ・甘えるようになった。 ・反発するようになった。
- ・ペットをほしがるようになった。(犬、猫、小鳥、ハムスター 等)
- ・外出できるようになった。 ・電話を避けなくなった。

組織として役割分担を決めても、その枠組みを固定化すると、柔軟な話し合いや対応ができなくなります。不登校児童生徒の実態を踏まえ、弾力的な対応を心がけましょう。



校長・教頭の強いリーダーシップが、校内組織全体の意識を高め、機動力のある教育相談体制を具現します。校長・教頭自身の「不登校を粘り強く解決する」というひたむきな情熱と姿勢こそが、自然に教職員を動かすのです。